

新訂 うまい英語で医学論文を書くコツ 世界の一流誌に採択されるノウハウ

植村研一 著

海外の研究成果に学ぶ時代なら英語論文は読めれば良かった。が、医学研究において、日本が最先端の一角を占める分野が珍しくなくなった。つまり、英語での論文発表が求められる時代になった。その時代に不可欠なノウハウを、長年に渡る英語論文の執筆・添削指導をしてきた経験から引き出し、多くの添削事例とともにまとめたのが同名書の初版であった。1991年の出版以来、30年近く読み継がれてきた名著の新訂版が本書である。

著者の植村研一先生は、中学時代に英語弁論大会に出場して以来、千葉大医学部卒業後は横須賀米国海軍病院でのインターンを経て、7年半にわたって米英に留学されるなど、英語をたくさん使ってきた経験を持つ。さらに帰国後も日本脳神経外科学会の英文機関誌に投稿される論文の英文添削にかかわり、日本医学英語教育学会や日本脳神経外科同時通訳団まで創設してしまっただ方である。

本書は、次の4部と付録からなる。「I 学術論文のうまい書き方」では、「1. 日本語の論文をいかにうまい英語に訳しても採用されない」理由を、論文採択基準の日米差などから説明し、採択されるようにうまく書くコツを紹介している。例えば、日本では「くも膜下出血後の脳血管攣縮についての研究」など研究課題をそのまま表題にした表示的タイトルが8割を占める。しかし、これでは診断、治療、予後、発生機序のうち何の研究なのか、臨床研究か動物実験か、どんな価値がある成果なのかわからない。採択率数%の一流雑誌では、タイトルだけで9割の投稿論文がゴミ箱行きとなるので、こんなタイトルでは採択されない。「イヌでのくも膜下出血後の脳血管攣縮発生におけるProtein Kinase C 関与の直接証明」のように内容や意義までわかる (informative) タイトルでなければならない

い。

「II うまい英語での表現法」では、英語と日本語とでは言語系が異なるので逐語訳では不適切であるとして、「うまい英語」を“comfortable English”などと意識するコツが25節にわたって紹介されている。評者の印象に残ったものを挙げれば、うまく意識すると逐語訳に比べて単語数が減るので短縮率が指標となる、意識の手順、paragraphと段落の違い、subjectは「主語」ではない、be動詞はできるだけ避ける、などである。

本書の圧巻は「III comfortable English 100本ノック——添削例の総合的解析」だろう。100の問題文をcomfortable Englishに直して、その全てに解説がついている。「IV さらに、comfortable English 100本ノック——原文と訂正文の対比」では、解説は省かれるが原文 (問題文) と訂正文、そして短縮率が示されている。6割から8割の短縮率が珍しくないから驚きである。「付録」には、週刊医学界新聞に掲載されたRobbins名誉教授との「対談 うまい英語で地球が狭くなる——アクセプトされる英語医学論文を書くために」、「よくみられる語、句の使用上の誤り」も収載されている。

本書を読んで、日本と英語圏での論文採択基準や考え方の違い、意識のコツを学び、200もの添削事例を通じて多くの気付きを得て、comfortable Englishで論文を書けば、論文採択率はアップするに違いない。

千葉大教授・予防医学センター社会予防医学研究部門/
国立長寿医療研究センター老年学・
社会科学センター老年学評価研究部長
近藤克則

A5・頁224 2019年10月
定価：本体3,200円＋税
[ISBN978-4-260-03936-9] 医学書院刊